

「宇平さん」の奉耕絵日誌



大正四年

たいしょう
だいじょうさい

大嘗祭

悠紀齋田
記念紀録

ゆき
さいでん
きねん
きろく

文・絵

池田節子

いけだ
せつこ

「うへい宇平さん」のほうこうえん奉耕絵日誌し

たいしやう大正四年

だいじやうさい大嘗祭

ゆきさいでんきねんきろく悠紀齋田紀念紀錄

はじめに

毎年十一月、その年に収穫された穀物を天皇が神に供え、天皇みずからも食す祭りが行われ、それを「新嘗祭」といいます。そして、天皇が即位した後に初めて行う新嘗祭を「大嘗祭」といいます。

大正四年に、大正天皇の大嘗祭が京都で行われ、その供えるべき穀物のうち、米は現在の岡崎市中島町の太田主・早川定之助さんの田でも栽培され京都御所へ納められました。



「宇平さん」とは、その当時の田で米づくりをした約百二十人の内の一人の若者であり、日々の内容を日誌に書きとめていました。

その誠実な様子を現代の子どもたちにも知ってもらいたく、なるべくわかりやすい言葉になおし、資料など参考にした絵を添え、この絵日誌ができあがりました。当時の人々の奉仕の精神と力の積み重ねによって大正の大嘗祭が成立したことを、多くの皆さんにお伝えできればと願っております。

池田 節子

大正四年四月十二日 雨天

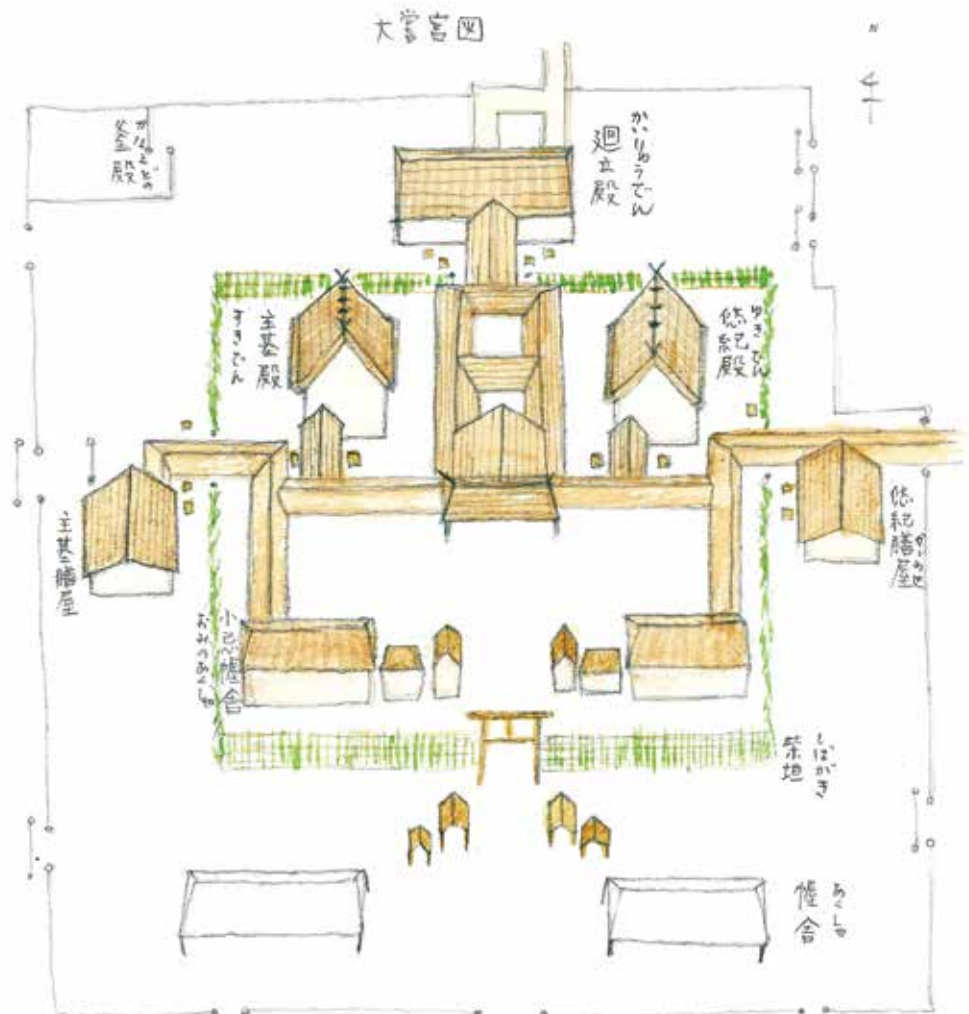
愛知県碧海郡旭村（現・碧南市
二本木町）に住む長坂宇平さんは
碧海郡六ツ美村（現・岡崎市中島町）
を目指し、羽織をきりりとまとい早朝
六時、徒歩で家を出発しました。



この年の秋、*京都御所で大正天皇の大嘗祭が行われます。大嘗祭は、天皇が*即位後、その年に収穫された穀物と、そのお米から造られた*御神酒、様々の*神饌を*大嘗宮の悠紀殿、主基殿で天皇の先祖と天地の神々に供え、天皇自身も共に*食し、みずから祭りを執り行うものです。

天皇一代に一度だけの最も重要な祭りです。そして、その供え物の主となるお米を、六ツ美村と香川県綾歌郡山田村（現・綾歌郡綾川町）の斎田という特別な田で作ると*亀ト等によって決まりました。

六ツ美村を悠紀斎田、山田村を主基斎田とい、斎田で作業する人を「奉耕者」と呼びます。宇平さんは、旭村を代表する一人として、奉耕者に*推挙されました。奉耕者は名誉なことで、県内から多くの希望者がありました。真面目な働き者であるのは勿論のこと、家系、人柄、学業など詳しく調べられ、認められた人だけが、奉耕者となりました。



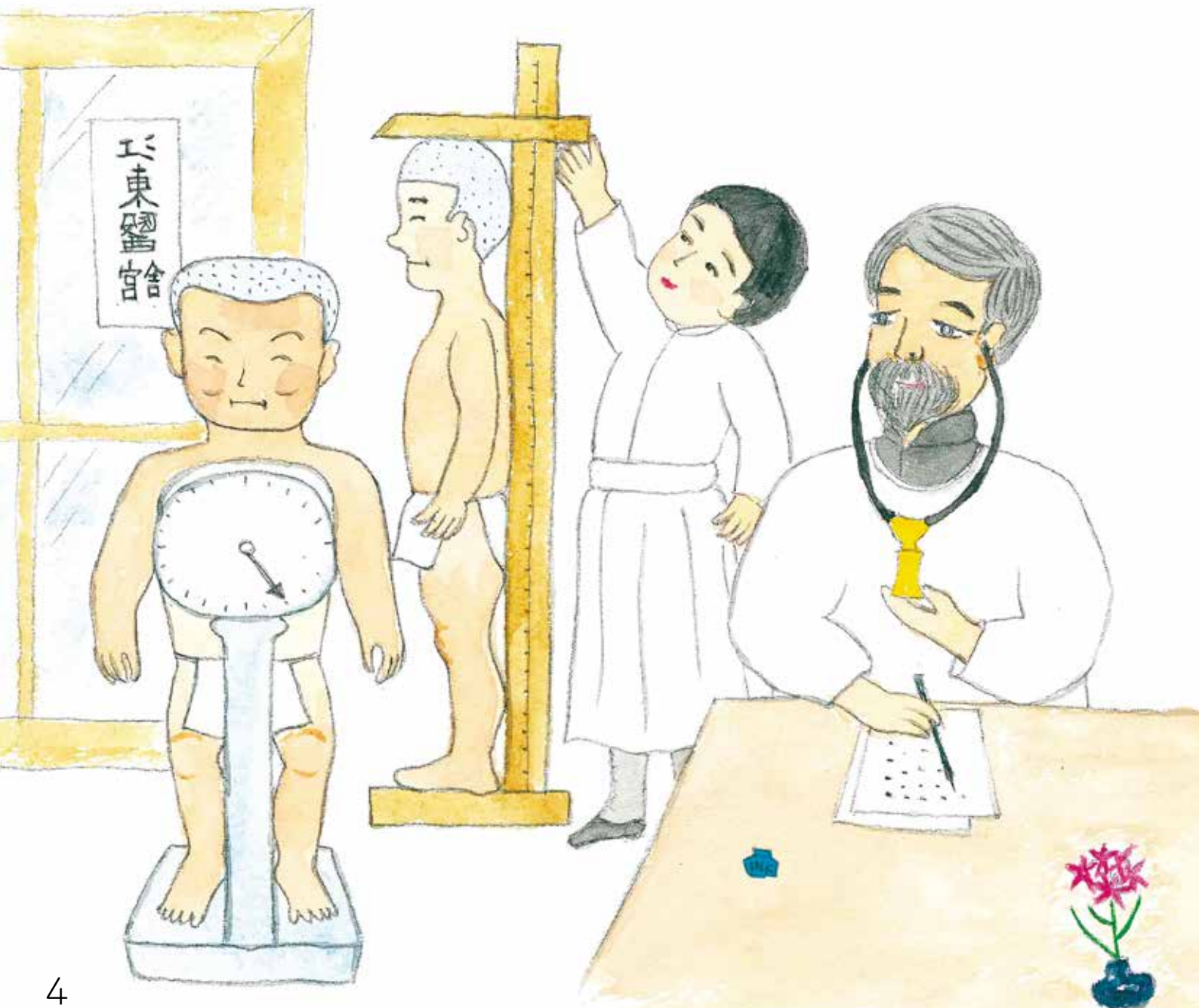
*京都御所

即位
御神酒
神饌
大嘗宮

(現在の京都御所の南東に、かつて位置した仙洞御所跡地を指す)
(天皇が位につくこと)
(神に供える酒)
(神に供える飲食物)
(大嘗祭を行うための建物)

食し (地位・身分の高い人への尊敬語。飲食することの言い回し)
亀ト (青海亀の甲羅を火であぶるうらない)
推挙 (ある仕事に適当な人だとして、すすめること)

歩き続けること二時間五十分。六ツ美村の悠紀斎田事務所に到着し、江東医館（現・志賀医院）で、九時から健康診断を受けました。宇平さんの身長は五尺三寸八分（約163cm）。体重は十三貫九百八十匁（約524kg）。身体は「強」とされ奉耕者候補となりました。審査は午後二時まで及び見事、奉耕者に決定しました。これから、真心込めての米作りにつとめます。



午後二時から六ツ美第三小学校で、講師の
訓示がありました。

●井深・碧海郡長殿より「御齋田奉耕者の心得」
について。

●山崎・農林学校長殿より「齋田の決定は、光
栄で歴史に残る素晴らしいこと」という話。

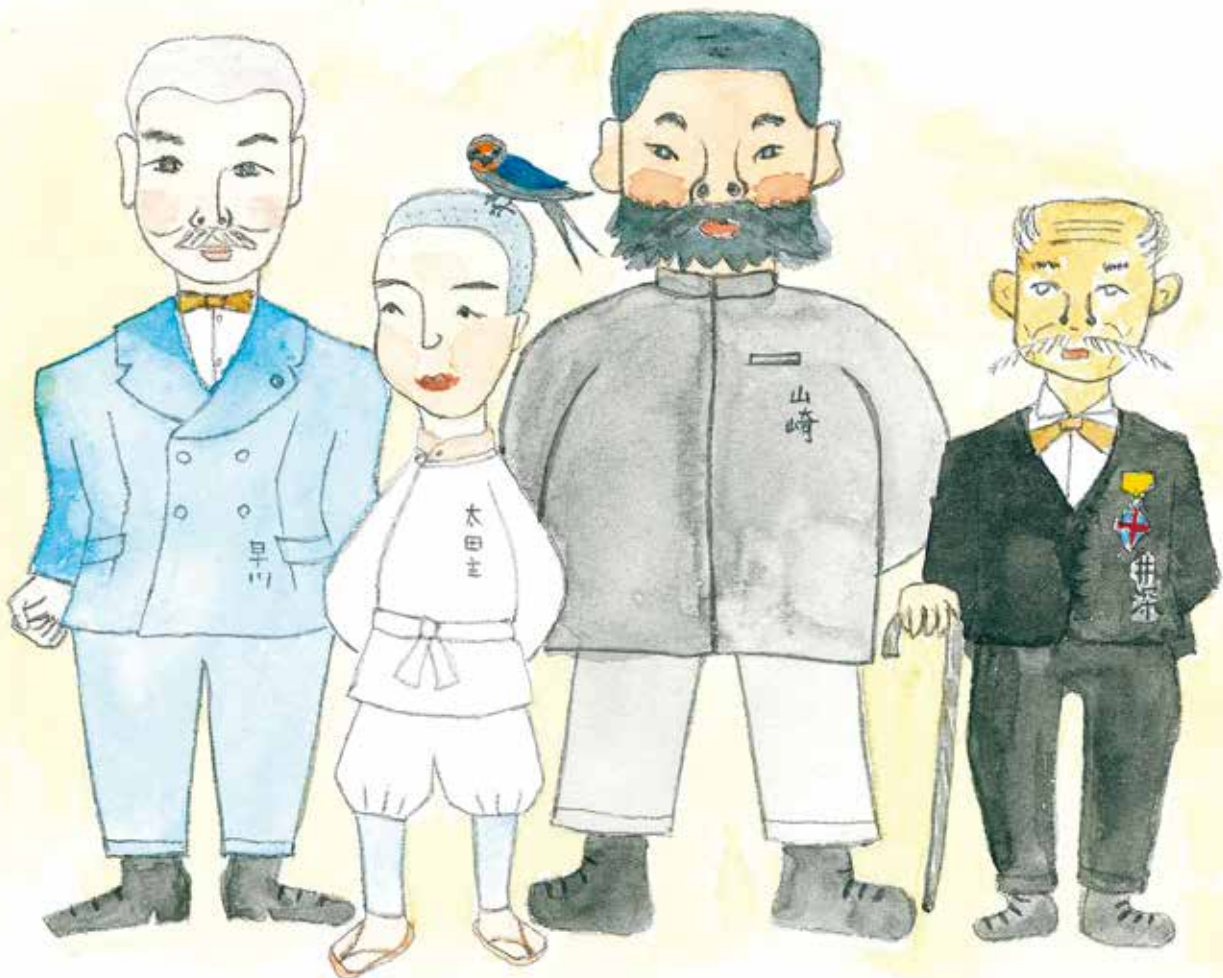
●太田主と呼ばれる齋田所有者の早川定之助殿
より、「皆で心一つにし、力を尽してくだ
さい。」というお願い。

●六ツ美村長・早川様より「奉耕者の心得」に
ついて説明がありました。

*訓示(教えること)

『悠紀齋田奉耕者心得』

第一条 悠紀齋田は神の御告げにより定めら
れ、大嘗祭にお供えする極めて大切な
新穀を栽培する所です。奉耕者は神
に奉仕する心を持ち、決して不謹慎
な行為をしないこと。



第二条 奉耕者は知事、郡長、所有者、その他の齋田関係委員の指揮に従うこと。

- 一、*就業一時間前に齋田事務所に出向くこと。
- 一、*謹厳、*誠意を*旨とし業務に*従事し、*少しも自分勝手な行為をしないこと。
- 一、器具物品は始業時に齋田事務所で受取り、終業時に清掃して返納すること。

第三条 奉耕者は左の*事項を堅く守ること。

- 一、工作物、耕作物を傷めないこと。
- 一、齋田で*喫煙、痰唾を吐いたり、小便しないこと。
- 一、作業中、雑談しないこと。
- 一、作業以外には齋田に出入りしないこと。
- 一、齋田地区内では履物を用いないこと。

第四条 病気、事故で*勤務できないときは速やかに届出ること。就業中の事故で勤務できない時も齋田

事務所へ届出ること。

訓示が済むと小学校玄関前で記念写真を撮りました。午後四時、風呂敷包みを抱え齋田事務所を出発、六時三十分、帰宅しました。いよいよ始まる奉耕者のつとめ。何せ家からは遠いので早起きを心に刻み、墨を磨り今日の記録をつけました。

*新穀 (その年に取り入れた穀物。米・粟など)

不謹慎 (不注意で軽々しいこと)

就業 (仕事が始まること)

謹厳 (注意深く規則をきびしく守ること)

誠意 (いつわりのない真実の心)

旨 (中心とすること)

事項 (ことからの一つ一つ)

喫煙 (たばこを吸うこと)

勤務 (仕事をする)

四月二十二日 曇天

夜明け前、五時二十分。わらじばきで家を出発。八時十分、齋田事務所に到着。

休憩所で真新しい奉耕式服を*賜り着用。御庭で記念写真を写しました。

この日は清祓式といって齋田の作業にかかるその前に、作業が無事に進むよう関係者全員を*御祓する儀式が行われます。

十時、式場入場。十時三十分、*号砲と共に清祓式は*挙行され一時間ほどで終了。休憩所で衣服を替え食事休みとなりました。

午後二時、崇福寺で有馬・*農商務省*嘱託から「齋田と農業」について、安藤・農商務省農事試験場技手から「米作りの改良」について二時間、盛大な講演が行われました。

四時三十分、齋田事務所を出発。七時四十分帰宅。

*賜り

(いただく)

御祓

(欲望や悪事だけがれた心を取り去ること)

号砲

(合図にうつ大砲、銃砲)

挙行

(式を行うこと)

農商務省

(農林・商工行政を管理する当時の役所。現在の農林水産省と経済産業省)

嘱託

(正式の任命によらないで業務を頼まれること、人)



五月七日 晴天

東の空が明るくなり始めた五時、家を出発。八時十分、齋田事務所に着。
九時、太田主宅で奉耕式服を着用し、村長宅で奉耕者一同の写真を書しました。その後、事務所井深碧海郡長殿より「齋田心得」について盛大な講話を聞きました。
三時三十分を終了し、太田主宅で衣服を替え、四時に中島を出発、七時に家に帰りました。



六月一日 晴天

梅の実が、ぷっくり
とふくらみ、つやつや
しています。午前六時
十分、家を出発。九時、
齋田事務所^{さいでん じむしょ}に到着^{とちやく}。

十時、八幡社^{はちまんしゃ}*境内^{けいだい}
で*俚謡^{りよう}の先生二人か
ら「御田植歌^{おたうえうた}」を二時
間、習いました。来る^{きた}
五日の御田植祭式^{おたうえ さいしき}に皆^{みな}
で一緒に歌うもので、今日が初めての練習日。なか
か上手^{うま}くいきません。

その一方、*早乙女^{さおとめ}たちは崇福寺^{そうふくじ}の御庭^{おにわ}で田植踊り^{おと}
の特訓です。食事休みの後、宇平^{うへい}さんたちも早乙女^{さおとめ}
共に三時間みっちり歌の練習を続けました。

午後四時三十分、齋田事務所^{さいでん じむしょ}を出発。七時五十分、
家に着き、わらじを脱ぎました。

*境内^{けいだい}

(社寺内の土地)

俚謡^{りよう}

(はやり歌、民謡など)

早乙女^{さおとめ}

(田植えをする女)



六月三日 晴天

午前四時、家を出発。六時二十分、斎田事務所^{さいでんじむしょ}に到着^{とちやく}すると潔斎所^{けつさいじょ}に向かいました。潔斎所とは、水、または塩を溶かした湯水で、心身を清める場所のことです。^{*}神聖な悠紀斎田^{ゆきさいでん}での作業にかかる前には「豊井^{ゆたかい}」と名付けられた井戸水^{いど}で、必ず潔斎^{けつさい}するといきまりでした。今日から、悠紀斎田での作業開始です。

七時、作業服を着、鎌^{かま}を手に草刈りを始め、午後からは鍬^{くわ}を持ち五時三十分まで整地をしました。

六時、衣服を替え斎田事務所^{さいでんじむしょ}を出発。暗い道を歩き八時四十分帰宅^{きたく}。それから晩御飯^{ばんごはん}、風呂に入り、斎田作業の記録をつけました。翌朝^{よくあさ}も四時頃に出発の予定です。

^{*}神聖（清らかで美しいこと）



六月四日 曇天^{どんてん}

午前四時十分、家を出
発。七時三十分、斎田^{さいでん}
事務所^{じむしょ}に到着^{とうちやく}。御田植^{おたうえ}祭式^{さいしき}
を明日^{あした}に控え^{ひか}、午前中は
崇福寺^{そうふくじ}で御田植歌^{おたうえうた}の練習^{れんしゅう}。
十二時に弁当^{べんとう}を食べ、一時
から二時三十分まで、式で
行う^{おこなう} *挿秧^{そうおう}の練習^{れんしゅう}をしまし
た。三時、崇福寺^{そうふくじ}境内^{けいだい}で、
山崎校長^{やまざきこうちやう}殿^{どの}から「御田植祭^{おたうえさい}
式^{しき}に対する奉耕者^{ほうこうしや}の心得^{こころえ}」
についての講演^{こうえん}を聞きまし
た。四時三十分^{しゆうりよう}に終了する
と、宇平^{うへい}さんは休憩所^{きゆうけいじよ}とさ
れる民家^{みんか}へ向かいました。

*挿秧^{そうおう} (田植えのこと)



明日の御田植祭式に備え、前もって
休憩所での宿泊を希望と申し出てあり、他
にも二人の奉耕者仲間と一緒にいたから、
若者三人は*話に花が咲き、ヒソヒソ声で
も楽しく夜を明かしました。

*話に花が咲く (次々と色々な話が出ること)



六月五日

曇天 どんてん

おめでたき、御田植祭式の朝です。
四時起床。きしょう * 即時潔斎。そくじけつさい 五時に朝食
を終え、七時に奉耕式服用。ほうこうしきふく 九時式
場入場。

辺り一面には、わんざわんざと見物
人が集まっています。出店も並び当地
では * 前代未聞ぜんだいみもんの人出となりました。

* 即時 そくじ
前代未聞 ぜんだいみもん (すぐ、その時)
(これまでに聞いたことのないこと)



いもうぎ
神々離

神に降りてきてもらう
こと。



おみめさ
大麻の儀

白木の棒に紙垂
(神の枝に紙垂をとリけ
にもある)を用い
左右と振って
けがれをばらう
こと。



えんとうず
塩湯の儀

神の小枝で
塩の入った湯を
左右と振リ
そぎおはらいを
する。



しんせん
神饌

野菜は3台分、他は1台づつ
を供えた。



たまごじ
玉串

神の枝に紙垂をつけた
もの。神におかす時に
用いる



十時、御田植祭式の挙行。愛知県知
 事、来賓、早乙女、奉耕者は*祓所に入
 場。*祓主は、*祓詞を*奏上。大麻の儀。
 神籬、神饌、知事、関係者、奉耕者、
 稲苗、来賓を祓いました。
 塩湯の儀、*奏樂が流れ、*降神の儀、
 神饌品が供えられました。
 太田主の*祝詞の奏上。知事、太田主、
 内務部長、郡長、村長、各議員の*玉串
 奉奠。
 *雅やかな*倭舞の後、早乙女、奉耕者
 は斎田に入り、太鼓の拍子で御田植歌を歌
 いつつ苗を植え、田植踊りを行いました。
 神饌品が下げられる間も奏樂が流れ、最
 後に祓主の*昇神の儀をもち、午後一時め
 でたく式は閉じられました。
 一時三十分、宇平さんらは休憩所に戻
 り*中食をすませ、二時から翌日の準備を
 し、五時に終了。衣服を替え五時三十分、
 中島を出発、八時帰宅。



*祓所はらそ（おはらいを行うところ）
 祓主はらぬし（おはらいをする人。神職）
 祓詞はらことば（神職がおはらいのために神に祈ることは）
 奏上そうじやう（国の統治者、神、天皇に申し上げること）
 奏楽そうがく（日本古来の祭用の歌舞）
 降神こうしん（神に降りてきてもらうこと）
 祝詞のりと（祭の際に神に奏上する一定の形を持ったことば。祓詞などもふくめる）
 玉串奉奠たまぐしほうてん（玉串をつつしんで供えること）
 雅やかみやびやか（上品で美しいさま）
 倭舞やまとまい（日本古来の祭用歌舞。歌に合わせて竜笛、箏、篳篥の伴奏による舞）
 昇神しょうしん（神にもどつてもらふこと）
 中食ちゆうじき（一日二食の時、朝食と夕食の間にとる軽い食事。昼食のこと）

六月二十一日 曇天どんてん

御田植祭式おたうえさいしきから半月がたった数日前、事務所から至急扱いの葉書を受け取りました。「大嘗祭の御用品として、藁わらと筵むしろも*供納きやうのうすることになりました。そのため、更に稲いねを栽培さいばいするので、六月二十一日、*出頭しゅつとうしてください。尚、当方で弁当べんとうを準備じゆんびします。」とありました。これを受け、早朝四時に家を出発。六時三十分、斎田事務所さいでんじむしょに到着。即時そくじ潔斎けつさいし作業服を着用。七時から夕方五時三十分まで食事休みの他は全て、鍬くわを手てに、ひたすら整地をしました。衣服を替え六時、斎田事務所さいでんじむしょを出発。八時三十分帰宅。

*供納きやうのう（大嘗祭で必要な物をおさめること）
 出頭しゅつとう（本人自ら出向くこと）

六月三十日 晴天

そろそろ梅雨^{つゆ}が明ける頃^{ころ}で
しょうか。

午前八時三十分、家を出
発。矢作川^{みやい}の美矢井橋^{みやい}近くの
河原^{かわら}に向かいました。夕方か
らの*大祓式^{おおはらえしき}に参列するた
め、式^{しき}が済^すむまでは何も食
べ
てはいけません。

午後二時三十分より東
堤防^{ていぼう}の松^{かげ}の陰^{かげ}で「悠紀斎田^{ゆきさいでん}
たのくさとりうた
田草採歌」の練習^{れんしゅう}をしまし
た。草とり作業^{くさとり}の時に皆^{みな}で揃^{そろ}
って歌います。

六時、矢作川砂原^{すなはら}で大祓式^{おおはらえしき}
が挙^{きよ}行^{こう}され、身^みの大祓^{おおはらえ}をし
ました。六時三十分、式^{しき}が終^はわ
り九時^{きたく}帰宅^{きたく}。

*大祓^{おおはらえ}（6月と12月の末日に宮中や神社で多
くの人の罪^{つみ}やけがれをはらうこと）



七月五日 雨天

午前五時三十分、家を出発。七時五十分、斎田事務所に到着。潔斎所で式服を着用し、斎田の接道で*真宗大谷派本願寺の御連枝殿をお迎えしました。
太田主は、真宗大谷派の*門徒であつたので、御連枝殿がわざわざ斎田の拝観にいらしたのです。
その後、小学校で御連枝殿より「奉耕者の心得と青年の心得」について、十時まで盛大な講演がありました。午後十二時四十分帰宅。

*真宗大谷派本願寺

(仏教の中の親鸞が開いた浄土真宗の一派の本山。東本願寺ともいう)
御連枝(真宗大谷派を代表する門首の補佐をする僧。現在は鍵役という)

門徒(浄土真宗の教えを受ける者)



七月七日 晴天

午前三時、家を出発。五時三十分、斎田事務所^{さいでんじむしょ}に到着^{とうちゃく}。即時^{そくじ}潔斎^{けつさい}し、作業服^{くさとりうた}を着用。六時から十時まで、草採歌^{くさとりうた}と共に田の草をとり、三十分間の食事休みの後も午後二時まで草をとりました。

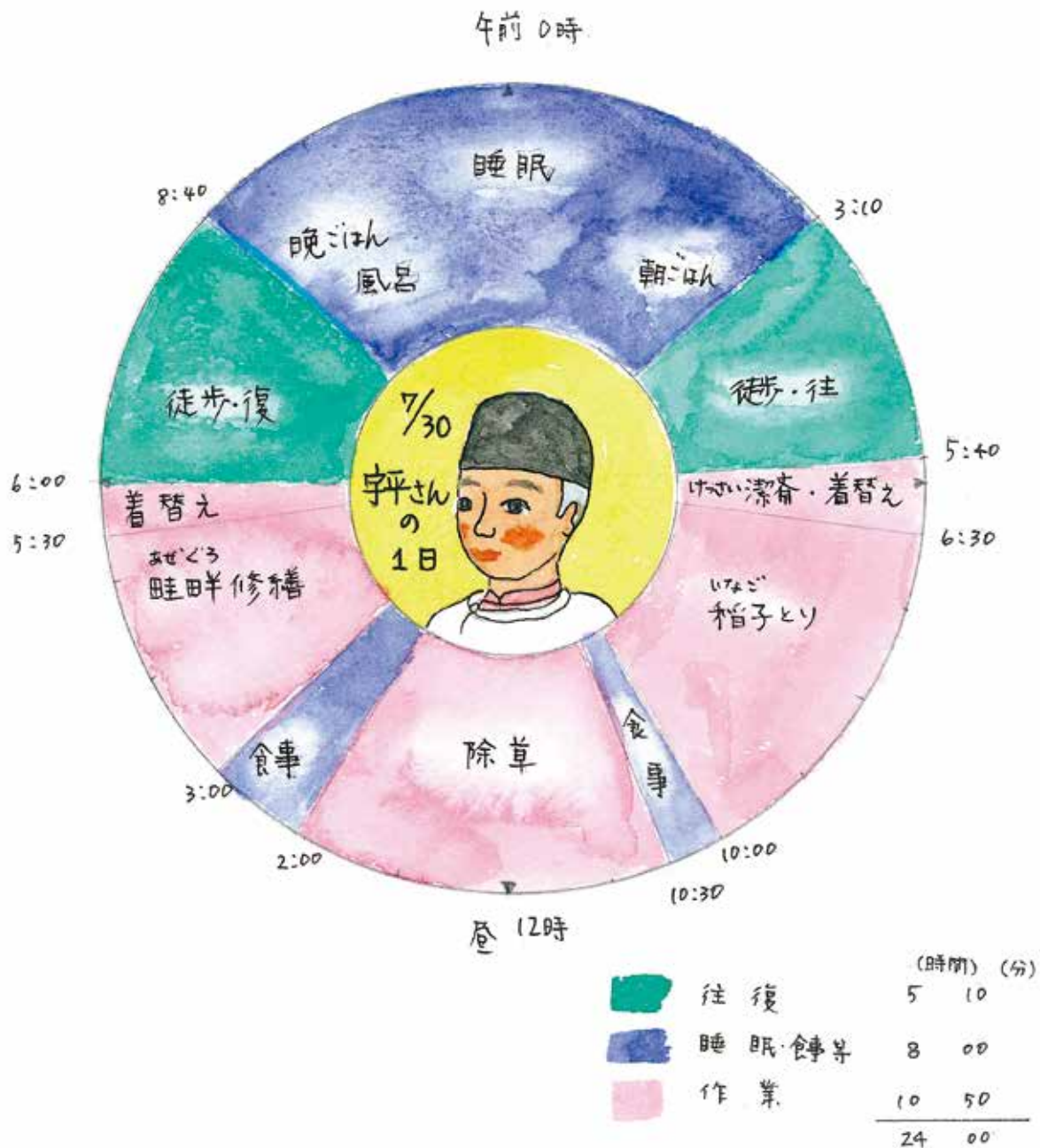
強い日射^{ひざ}しの下^{もと}での草とり。針^{はり}のように尖^{とが}った稲^{いね}の葉先^{はさき}が時たま、チクツと顔を刺^さしてきます。

二時の食事休みの後、三時から^{*}悪水路^{あくすいろ}の土管^{どかん}のいけかえ工事をし、五時三十分^{しゅうりよう}終了。

衣服^{いふく}を替^かえ六時、斎田事務所^{さいでんじむしょ}を出発。八時三十分帰宅^{きたん}。

*悪水路^{あくすいろ}（汚水^{おみず}を流す溝^{みぞ}・下水道）





七月三十日 晴天

午前三時十分、家を出発。五時四十分、斎田事務所に着。即時潔斎、作業着を着用し斎田へ。

稲は青々とし腰の丈ほどに生育しています。六時三十分、稲の害虫、稲子の駆除にかかりました。大きな白い布を広げ、稲の上をふわりと覆うとバタバタと羽音がし、稲子が布にくっつきます。十時まで次々と稲子を捕りました。

三十分間の食事休みの後、十時三十分から午後二時までは草を刈りました。

二時から食事休み。三時から傷んできた*畦畔を修繕し五時三十分、作業終了。衣服を替え六時、斎田事務所を出発。八時四十分帰宅。

*畦畔 (田と田の間の土を盛り上げたところ)

八月六日 晴天

午前四時十分、家を出発。七時十分、斎田事務所^{さいでんじむしょ}に到着^{とうちやく}。即時^{そくじ}潔斎^{けつさい}し作業服を着用。

稲^{いね}の生育は良好で穂^ほが伸びてきました。するとまた、たくさん^{いなか}の稲子^{いなご}が、稲^{いね}をかじりに集まっていたので、十時まで稲子^{いなご}を捕^とりました。

三十分間の食事休みの後も、二時まで捕^とり続けましたが、まだまだたくさんいます。一時間の食事休みの後は、十八人に増員^{ぞういん}して五時三十分まで、稲子^{いなご}を捕^とりました。

衣服を替^かえ六時、斎田事務所^{さいでんじむしょ}を出発。八時四十分帰宅^{きたく}。



八月十五日 晴天

午前四時、家を出発。六時四十分、斎田事務所に到着。即時潔斎し式服を着用。

今朝は、斎田西隣で地鎮祭が行われます。

地鎮祭は、土木建築工事の前にその土地の神様をお祭りし、工事の無事を祈願する儀式です。来月の*抜穂式で使われる建物が造られるのです。

七時三十分、地鎮祭式場に入場。八時、*掌典をはじめ*高位高官数名によって地鎮祭の挙行。

御祓い、祝詞の奏上。式場内の四角の穴に塩・酒・米・*切麻を撒き、中央の穴に*鎮め物を納め、一時間ほどで式は終了。衣服を替え午後十二時帰宅。

*祈願

(神仏に祈り願うこと)

抜穂式

(稲穂を収穫する式。一本一本稲穂を抜き取る)

掌典

(皇室の祭りをつかさどる職員)

高位高官

(地位の高い役人)

切麻

(麻または紙を細かに切ったもの)

鎮め物

(地鎮祭で、地中に埋める物)



抜穂式の建物



神殿正面



稲實殿正面



神饌殿

九月十日 晴天

午前六時十分、家を出発。八時三十分、齋田事務所に到着。即時潔斎し式服を着用。

九時の汽車で河野・農商務大臣閣下殿が、齋田視察のため、奉耕者一同も御出迎えです。大臣閣下殿の齋田拝観にお供をし、その後は、休憩所で講演会となりました。

一、悠紀齋田奉耕者たる一層の尽力。

二、*千載一遇の名譽を永遠薫らせよ、との事。

九時四十分終了。十時、大臣閣下殿のお帰りを見送りました。十二時から食事休み。

*尽力

(力をつくすこと)

千載一遇

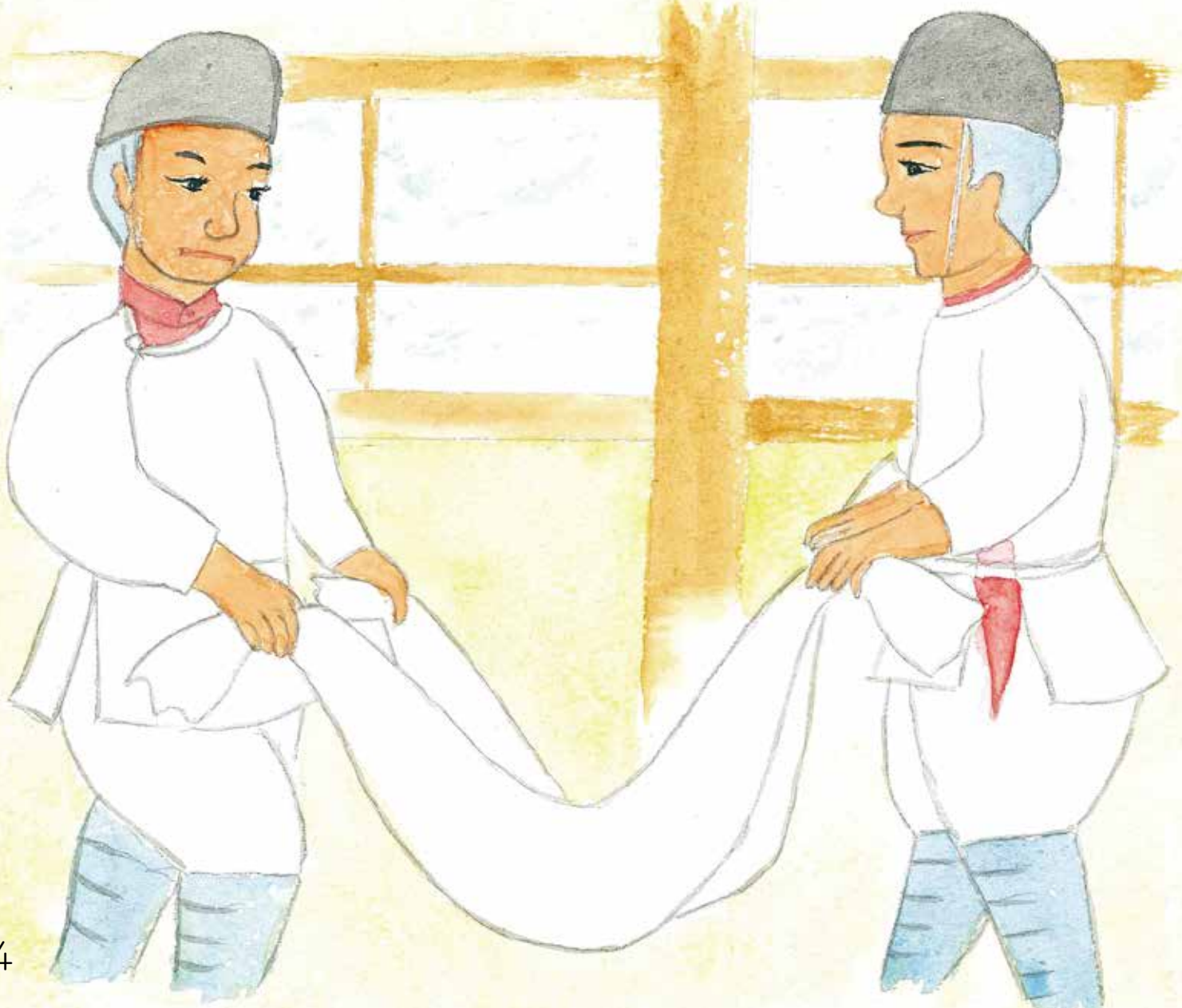
(千年に一回しかありえないような、めったに無いこと)



一時から米を選別する練習をしました。練習に使う米は、昨年収穫されたもので、玄米を十八時間ほど精米機にかけ白米にしてありました。その白米を一升五合ずつ綿の長袋に入れ、二人一組で持ち、二時間ほどさらさらと米を転がすようにします。そうして磨いた米を盆の上に広げ、篋で粒を選びました。一名当り、*七、八勺ほどを選別し四時三十分終了。

衣服を替え五時に斎田事務所を出発。七時五十分帰宅。

*一升五合(21kg・米一升は14kg・一合は140g)
七、八勺(約100g・一勺は一合の十分の一)



九月十五日 晴天

午前四時三十分、家を出発。霧の中を歩き、七時二十分、斎田事務所に到着。即時潔斎し作業服を着用。

十時まで稲を刈り、三十分間休憩。十時三十分から稲刈りと稲扱きをしました。午後二時から食事休み。三時から五時まで稲扱きを続けました。

衣服を替え午後五時三十分、斎田事務所を出発。沈みそうな夕日に向かい、八時十分帰宅。



九月十九日 晴天

午前七時三十分、家を出発。道端に咲く彼岸花に目が留まります。

十時二十分、斎田事務所に到着。潔斎をすませ、奉耕式服を風呂敷に包み、

美矢井橋上流、大聖寺近くの河原を目指し、十二時、事務所を出発しました。

そこでは、「大祓の儀」といって、明日の抜穂式に参列する関係者等をお祓い

する儀式があります。儀式にあたり、

近くの家で着替えをすませました。

三時、「勅使」といわれる天皇の御

使いの北郷掌典と、高位高官のお出迎

えをしました。勅使は「抜穂の使」と

いう命を受け、今日と明日の儀式を執

り行います。

小舟で川の中流あたりにすすみ大祓

の儀式が行われました。

儀式を終え、御勅使は明日の抜穂式

に備え、二頭馬車で宿泊先の六ツ美

斎館へ。そのお見送りの後、斎田

事務所で衣服を替え、五時四十分出

発。八時十分帰宅。

*斎館（神職などがこもって身を清める館）





九月二十日 晴天

五時、ひんやりとした夜明け前、家を出発。七時四十分、斎田事務所に到着。

この日は、拔穂式といって、大嘗祭で供える少しの稲穂を収穫する重要な儀式があります。潔斎、式服用後、式の説明を聞きました。

十二時三十分、拔穂式挙行。御祓い、神饌品が供えられ、勅使は拔穂の使として祝詞を奏上。

太田主を先頭に十名の奉耕者は斎田に入り選抜した稲穂を鎌で刈り、三宝におきました。稲穂は拔穂の使に点検された後、太田主が稲實殿に納めました。

愛知県知事閣下、高位高官は玉串奉奠。一般職員、奉賛会、奉耕者一同拝礼。



十二時二十分、めでたく式を終え、宇平さんらは休憩所で衣服を替え、祝盃をあげました。食事をすませ、一時四十分、斎田事務所を出発。満ち足りた心地で四時三十分帰宅。



九月二十一日 晴天

午前四時三十分、家を出発。
七時十分、齋田事務所に到着。
潔齋し奉耕式服を着用後、小学
校前の道に並び、御勅使をお送
りしました。その後、作業服に
替え、齋田に入り二時まで標本
用の稲株の抜き取りをし、食事
休みの後も三時から五時まで続
けました。



悠紀斎田へ通い出してから初めてのこと「汽車で帰ろう。」
と思い立ち、西尾鉄道中島駅で「西尾まで一枚。」十一*銭の切符を握り、汽車を待ちました。
五時五十二分発車。車窓からは、
黄金色に輝く六ツ美村が見えます。ガッタンゴトンと三十分間揺られ、西尾駅からは歩き、八時十分やっとこさ帰宅。汽車に乗るのもいい気分でした。

*銭(当時のお金の単位。100銭で一円)





九月二十八日 曇天^{どんてん}

午前四時三十分、家を出発。七時十分、斎田事務所^{さいでんじむしょ}に到着^{とうちゃく}。潔斎^{けっさい}し作業服を着用すると、気が急^せきました。雨模様^{あまもよう}のため、稲架^{はざ}に掛けてある稲^{いね}を稲實殿^{いなのみでん}と神饌殿^{しんせんでん}に積み込みました。続いて小学校に稲架^{はざ}掛けしてある稲^{いね}も校舎内^{こうしゃい}に積み込みました。昼食の後、一時からは収納舎^{しゅうのうしゃ}の整理と、明日の稲扱^{いねこ}きの準備^{じゅんび}をしました。五時三十分、作業を終え六時、斎田事務所^{さいでんじむしょ}を出発。日が沈^{しず}むと冷えてきました。八時四十分帰宅^{きたく}。



九月二十九日 曇天^{どんてん}

午前四時、家を出発。六時五十分、齋田事務所^{さいでんじむしょ}に到着^{とちやく}。潔斎^{けつさい}し作業服^{しゆうのうしや}を着用後、収納舎^{しゆうのうしや}前で御祓式^{おはらいしき}に参列し、御祓^{おはら}いを受け作業に就きました。

午前中は小学校の校庭で、昼休みの後は、齋場^{さいじよう}内の^{*}握舎^{あくしや}で稲扱^{いねこ}きをしました。

六時、齋田事務所^{さいでんじむしょ}を出発。八時二十分帰宅^{きたく}。

十月三日 曇天^{どんてん}

午前四時十分、家を出発。七時二十分、齋田事務所^{さいでんじむしょ}に到着^{とちやく}。即時^{そくじ}潔斎^{けつさい}、作業服着用。

八時から小学校の教室で、選米所^{せんまいじよ}の準備^{じゆんび}を手伝いました。

昼休みの後、晴れてきたので、小学校の運動場^{うんぽうじやう}に広げ干^ほしました。運搬^{うんぱん}し藁筵^{わらむしろ}に広げ干しました。

二時から五時まで選米所^{せんまいじよ}の準備^{じゆんび}を続け、五時三十分、齋田事務所^{さいでんじむしょ}を出発。八時帰宅^{きたく}。

^{*}握舎^{あくしや}（儀式^{ぎしき}、祭りなどで庭^もに設ける仮屋^{かりや}）



十月五日 晴天

午前五時、重たい荷物を背負い家を出発。中には、白足袋、*清浄な下着、手拭、四升の白米が入っています。

今日からは七日間連続で、選米と米磨きをするため、家が遠い人は休憩所で宿泊します。その際、一日当たり女は四合、男は五合の米を持参のこととありました。荷は少しでも軽い方が楽ですし、どこの家でも米は大切に余分なお米は一粒もありませんでしたが、一日分多く用意していきましました。

*清浄（清らかで汚れないこと）



七時四十分、齋田事務所に到着。潔斎し作業服を着用。八時から収納舎で米磨きにかかりました。六尺（約182cm）の麻の長袋で三十分、木綿袋で一時間三十分、二人一組で磨きます。

十時、小学校の選米所で島村技師から、選米の注意と心得について、次のように話がありました。

「心を清め口にマスクを掛け、机の上で盆にのせ、篋で屑米を一粒一粒選別してください。」

昼休みの後も午後一時から六時まで収納舎で米磨きをしました。

*屑米（見た目に悪い米）



今夜は宿泊初日。早川さんの家で宿泊します。

十月六日 曇天

宿泊所での朝を迎えました。五時起床、即時八幡社に参拝。潔斎し食事をすませ、七時に小学校へ出発。八時から選米に奉仕し、昼食後も一時から五時三十分まで続け、宿泊所へ帰りました。

*参拝（社寺に参り神仏を拝むこと）



十月七日 雨天

午前五時十分、起床。即時
八幡社に参拝。潔斎し食事を
すませ小学校へ出発。

八時から選米を始め、昼食
の後も三時まで続けました。

中島駅三時着の汽車で、愛
知県知事閣下が到着。作業の
*視察に来られ、そのお帰り
を見送りました。

午後五時三十分、選米作業
を終了し、宿泊所へ帰しまし
た。

*視察（その場の状況を見きわめること）



十月八日 晴天

午前四時五十分、起床。即時
八幡社に参拝。潔斎し朝食前に
一仕事。供納する藁と筵を中島
駅まで運搬しました。

七時三十分より、作業服を着
用し収納舎で米磨き。一升五合
を麻の袋で三十分、次に木綿の
袋で二時間三十分、麻袋と木綿
袋とを繰り返し、五時に終了。
宿泊所へ帰りました。

十月九日 晴天

午前五時十分、起床。即時潔斎。食事
をすませ七時三十分、小学校へ出発。八
時から選別作業をし、五時終了。

今晚、家の都合で自宅に帰るため、
五時二十分、斎田事務所を出発、八時
帰宅。



十月十日 晴天

午前四時五十分、家を出発。七時四十分、斎田事務所に到着。即時潔斎。作業服を着用し、選米所に入りました。昼休みの後も四時四十分まで選米に従事。一日の作業を終了し、宿泊所に帰りました。

十月十一日 曇天

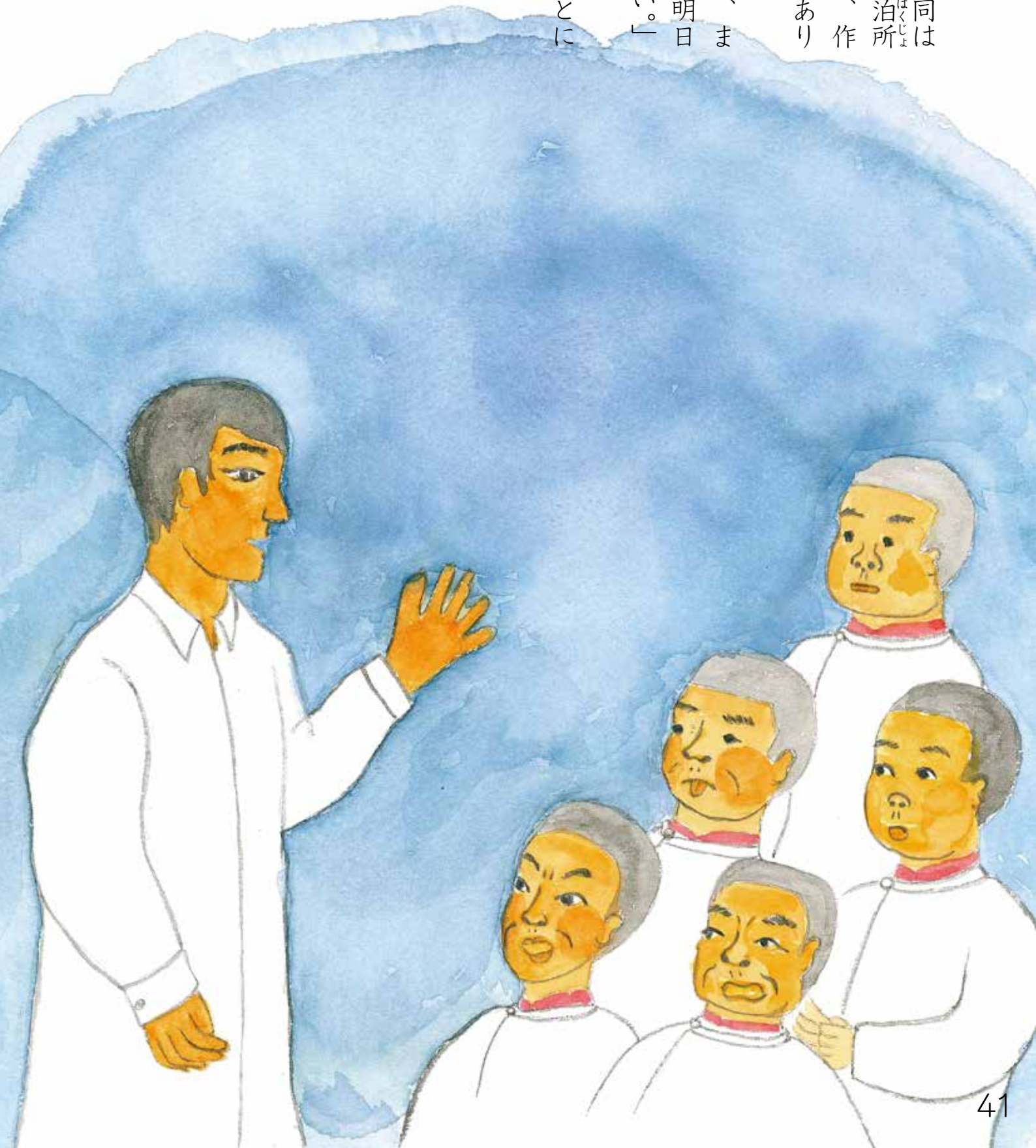
選別最終日、午前五時十分起床。即時八幡社参拝。潔斎し、食事をすませ選米所に向かい、八時から選米に従事。

午後二時、農商務省技手が、視察に来られ、お帰りを見送りました。

今日は、中島八幡社の祭礼。



四時、奉耕者一同は
参拝をすませ、宿泊所
に戻ったところに、作
業部より知らせがあり
ました。
「供納米の選別が、ま
だ残っています。明日
も出頭してください。」
…もう一泊すること
になりました。



十月十二日 晴天

午前五時起床。即時八幡社に参拝。潔斎し
食事をすませると、宇平さんら五人は炊事当
番を命ぜられ、昼食の仕度と片付をしまし
た。二時から選別にかかり、四時三十分、
ついに発送する供納米*一石(140kg)の選別
が全て終了しました。

*一石(体積の単位で、米一升を14kgとした時、一斗は一升の十倍、

一石は一斗の十倍とした)



来る十月十五日の京都御所への供納米御送の件について、事務員より次のように注意がありました。

● 午前十時までに齋田事務所に集合。

● 午後一時三十分、中島出発。

● 京都御所内へ供納するまで奉耕式服を着用のこと。

● 服装は、あわせ一枚、袴、鳥打帽子、履物は白の麻裏草履、白足袋を用意のこと。

四時五十分、齋田事務所を出発。七時二十分帰宅。



・鳥打帽子... 小さな前びさしのついた平たい帽子。ハンチングのこと。

・裕... 表布と裏布の二枚合わせた着物。10月から5月頃に着用する。又、季節に応じて表布だけにして着るのを単(ひとへ)というよ。

・袴... 着物に重ねて、腰から足までをふくむもの。ズボンのように両脇が二つに分かれているものや、スカートのように広がっているものがあるけど、種類も多いよ。

・麻裏草履... 草履の裏に麻糸をうすまきにして、はりつけたもので、じょうぶなつくりになるよ。

・白足袋... 白色の足袋。清いことを示す意味。

十月十五日 晴天

*爽快な朝です。七時三十分、家を出

発。九時四十分、斎田事務所に着。
即時休憩所で制服を着用し八幡社へ。

十時、愛知県知事閣下を出迎えました。

十時三十分より斎田関係者、青年会、

*在郷軍人、小学校生徒、諸役員一同は
八幡社に整列し、めでたき發送式挙行。

御祓いが行われ、知事は、*唐櫃の白

米を点検し、*玉串奉奠。

*爽快

在郷軍人

(さわやかで気持ちがいいこと)
(平常は生活のための仕事をし、戦時、天災時に必
要に応じて召集された軍人)

唐櫃

(足の付いた箱)

玉串奉奠

(玉串をつつしんで供えること)



式の後、知事から感謝の意と
齋田*点定の歴史と由来、郡村民
の将来の覚悟と心得について訓示
がありました。

続いて、湯地・内務部長から
感謝の意と六ツ美村民の将来の
覚悟について。

原口・産業課長から感謝の意。

山崎・農林学校長から齋田成功の

喜びの言葉。

早川・六ツ美村長から京都供納米
御送における奉耕者心得について
訓示がありました。

式を終え、食事をすませました。

*点定（悠紀、主基田の場所が決まること）



午後一時三十分。

村民、在郷軍人、青年会、小学生に送られて斎田事務所を出発し、四時四十分、安城町役場に到着。

供納米唐櫃五個を役場内斎納場におき、奉耕者一同は衣服を替え、安城町議事堂で宿泊しました。翌朝、安城駅から列車で京都へ向かいます。



十月十六日 晴れ曇り

午前三時三十分、起床。^{きしやう} 即時式服^{そくじしきふく}を着用し、
五時、議事堂^{ぎじどう}出発。安城^{あんじやう}駅へ向かいました。
青年会^{せいねんかい}、在郷軍人^{ざいこうぐんじん}、小学生等の「万歳^{ばんざい}」の
に送られ列車は安城^{あんじやう}駅を発車しました。

6時13分

安城^{あんじやう}

6時24分

刈谷^{かりや}

7時14分

名古屋^{なごや}

8時10分

木曾川^{きそがわ}

9時48分

醒ヶ井^{さめがゐ}

～

12時25分

京都

供納米室^{きやうのう}に注連縄^{しめなわ}を張る。

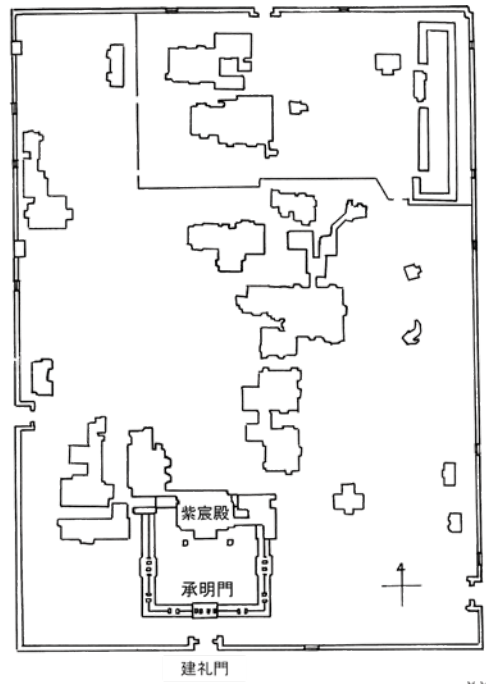
京都駅で一同整列し、警察部長^{けいさつぶちょう}を先頭に、
百五十名の行列で御所^{ごしよ}に向かいました。



午後二時五分、御所
に到着。休憩所でお茶
をのみました。
二時三十分、悠紀
供納殿奉納式に参列
し、三時十分、式は
終了。



* 拝観（礼をもって見ること）

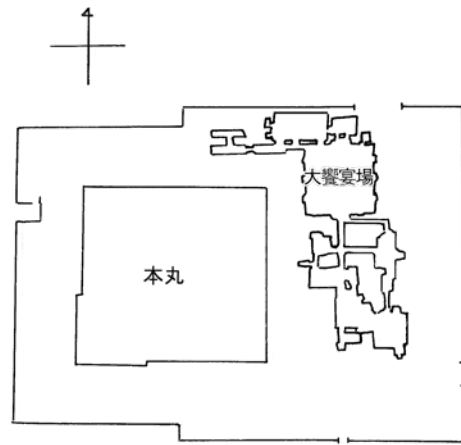


京都御所

門、御所内室の* 拝観が許され、承明
紫宸殿内室を拝観。



続いて、*二条離宮^{にじょうりきゅう}に向かい、離宮^{りきゅう}内室、*宴会場^{えんかいじょう}を拝観^{はいかん}しました。
宴会場^{えんかいじょう}は*白木造り^{しらきづく}で、*そぎ葺き^{ぶき}の屋根。内部中央には舞台^{ぶたい}があり、「何とも言えぬ美しきこと、このうえ無し。」と感激^{かんげき}。
拝観^{はいかん}を終え、男子は六条通り^{じゅうじょうどおり}の新川屋。女子は永楽館^{えいらくかん}で宿泊^{しゅくはく}。



二条離宮

*二条離宮^{にじょうりきゅう}

(今の二条城のこと)

宴会場^{えんかいじょう}

(右図中の大饗宴場を指す)

白木造り^{しらきづく}

(材木の着色等せず建築すること)

そぎ葺き^{ぶき}

(檜の樹皮を用いた屋根のつくり方のことを指すと考えられるが、不明)





十月十七日
雨天

京都での朝
を迎えました。
五時三十分、
起床。即時式服
着用。東本願寺
* 本山に * 参詣
し、* お朝事で
* 御真影拝礼。
* 御門跡のお出
まし。* 法話の
後、全部のお
座敷を拝観。



宿に戻り朝食をすませ、九時より* 枳殻邸
を拝観。十一時より明治天皇の墓所である
伏見桃山御陵に参拝。

午後二時、宿で衣服を替え、京都駅で四時
四十一分発の帰りの列車に乗り込みました。
十一時、刈谷駅で降りた後、三時間歩き深夜
二時五分無事帰宅。

* 枳殻邸 (東本願寺の飛地境内地 (別邸) 庭園の美で有名。渉成園
ともいう)



* 本山

(一宗・一派の代表の寺)

参詣

(神仏にお参りに行くこと)

お朝事

(浄土真宗で、毎朝のお勤めに声を出
してお経を読むこと。晨朝)

御真影

(本山、東本願寺御影堂に安置される
親鸞聖人の木座像。八百年前の聖人
であるが、今もそのお姿を通して教
えをいただくことを形どっている)

御門跡

(真宗大谷派の僧侶・門徒の代表者。
現在は門首という)

法話

(仏の説いた教えに関する話)

10月16日

- 12:25 京都駅着
 14:05 京都御所着 お茶をのむ 
 14:30 悠紀供納殿奉納式参列
 ?
 15:10 " 式終了

御所内室・承明門
 紫宸殿内室 拝観

二条離宮内室
 宴会場 拝観

新川屋泊
 (場所不明)



御所へお米を納めてから
 たくさん拝観・参拝を
 いたしました。

10月17日

- 5:30 起床 即時式服着用
 東本願寺本山参詣
 御真影拝礼 お座敷拝観
 宿で朝食

9:00 杖殻邸拝観

11:00 伏見本北山御陵参拝

14:00 宿で着替え

16:41 京都駅発

23:00 愛知県刈谷駅着
 徒歩で3時間

↓
 帰宅は10月18日 深夜2:05

京都駅

東本願寺

杖殻邸



伏見
 桃山陵



鴨川

宇治川

桂川

十月二十五日 雨天

京都での出来事から十日ほどがたち、家の畑仕事に精を出しています。数日前、事務所から届いた葉書に「二十五と二十六日、作業のために出頭してください。」と書いてありました。

それを受け午前五時、家を出発。七時四十分、事務所に到着。即時作業服を着用。収納舎で、*大礼御用米の選別作業にかかりました。白米、一石二斗五升（約175kg）を選別し、俵装にしました。五時、作業を終え、八時帰宅。

*大礼御用米（大嘗祭後の盛大なもてなし《大饗の儀》で、天皇と参列者がいただく食事と御神酒となる米）



十月二十六日 曇天

午前四時二十分、家を出発。七時五十分、齋田事務所に到着。即時作業服を着用。選米に従事している二十二時、大礼御用供納米の選別が全て終了しました。

午後二時、齋田関係者一同は、崇福寺に集合しました。

「本日をもって、悠紀齋田作業は、全部終了しました。皆様のおかげです。」と太田主から御礼の言葉がありました。

続いて福引、*園遊会となり奉耕者の技芸が披露されました。五時十分、めでたき*三河萬歳をもって終了となり五時三十分、八幡社に参拝し、八時十分帰宅。

「大嘗祭悠紀齋田作業めでたく終了」といつもより大きな字で記録し、筆をおきました。

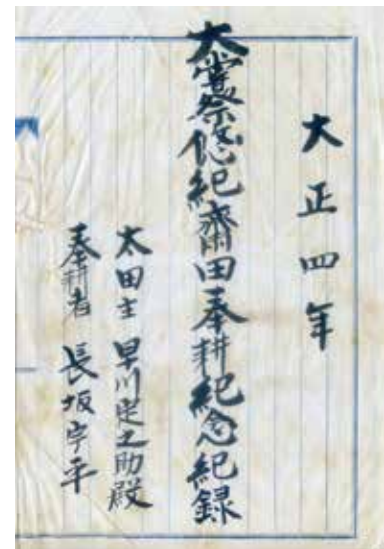
*園遊会

(祝事で、多くの人を招き、庭や屋外で余興や食事などでもてなす会)

三河萬歳

(めでたい文句を唱え歌い舞えば、歌の通りになると信じる芸を萬歳という。江戸時代、三河と縁のある武家を回り萬歳をし、もてはやされ三河萬歳と呼ばれた)

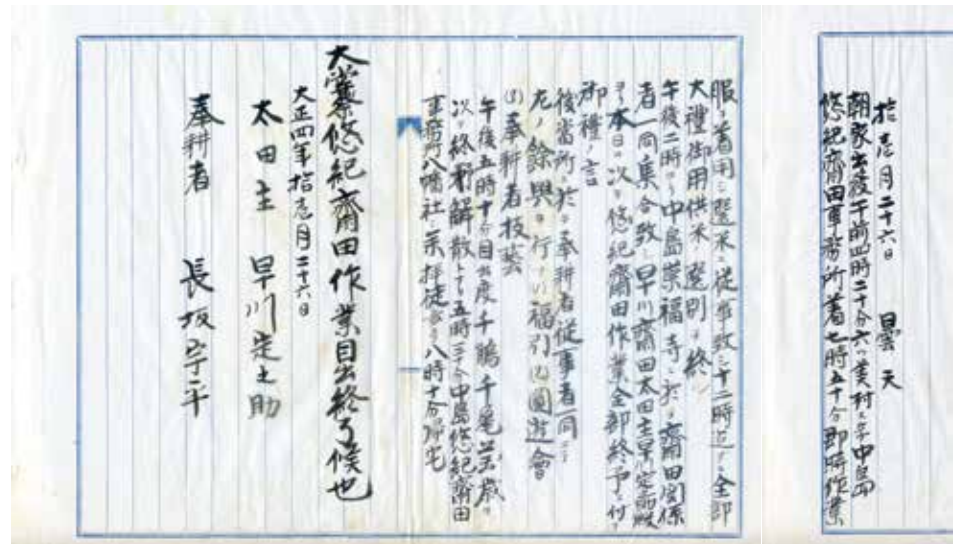




大正4年4月12日の記録

日誌表紙

● 志賀医院と記録にあるが、大正四年当時は江東
 医館であり、その後志賀医院と改められた。
 ● 志賀医院と表記されていることで日誌の清書
 にあたり宇平さんが改めて中島を訪れたであろ
 うことが伺い知れる。
 ● 11月26日と記録にあるが、作業内容と外の通達
 文書の両点から10月26日のことと判断した。



大正4年10月26日の記録



宇平さんは後ろより二段目 向かって右から三人目

あとがき

百年前の日本語だから読めそうかな…と着手したものの、大嘗祭悠紀斎田という特殊な祭祀を理解し日誌内容を検証することは、その方面の知識を全く持たない私には難しいことでした。「どうやら自分の手に余る内容であった。」と気づいた時のショックは大きく、机に突っ伏して泣きました。でも不思議と放棄する気にはなれず、それを機に逆に意欲的になりました。

宇平さんは、斎田まで徒歩で通い、その出発と帰宅時刻だけに注目しても、いかに誠実に奉仕されたのかが見て取れます。

日々の記録を後日改めて罫紙に清書されたことを知り、何としてもこの日誌に光を当てるべきだと感じました。また、宇平さんの硯、机等にも触れ、更にその思いは強くなりました。

昨年末、幸いなことに恩師、中出美代先生の協力を得、「宇平さんの奉耕絵日誌」の刊行が決まりました。それに伴い非常に多くの方々から御支援をいただき、深く感謝いたします。この絵日誌制作に着手してからというもの不思議なほど次々と支援者が現れたことは、「時空を超えた宇平さんからの贈り物」だと受けとめています。折しも、本年十一月に令和の大嘗祭が行われます。その斎田は、九月に決まりました。時代によって方法は変われど、人の心は変わらないことでしょう。この時機に「宇平さんの奉耕絵日誌」が刊行できることを喜びとし、今後も様々な形でこの贈り物を活かしていきたいと思えます。

令和元年十月吉日 池田節子

主な参考文献

- 『御即位禮画報』第参巻 大正3年3月20日 御即位記念協會
- 『列車時刻表』大正4年5月10日訂補 鐵道院運輸局
- 『斎田記念中島案内』大正4年6月5日 牧喜丸
- 『新愛知』第八五九七號 大正4年6月6日 株式会社新愛知新聞社
- 『悠紀斎田記念寫真帖』上巻 大正4年9月20日 愛知懸
- 『悠紀斎田記念寫真帖』下巻 大正5年3月5日 愛知懸
- 『太陽御大禮記念』大正4年11月25日増刊 博文館
- 『悠紀斎田記録』大正5年3月25日 愛知懸
- 『京御所離宮』昭和39年9月10日 小西六写真工業株式会社
- 『復刻版六ツ美村誌』昭和61年11月15日 六ツ美地区総代会連絡協議会 愛知県郷土資料刊行会
- 『神職寶鑑』平成19年3月30日 復刻第三版 臨川書店刊 半井真澄編
- 『悠紀の里』平成20年10月1日 岡崎市六ツ美南部小学校
- 『皇學館大学 佐川記念 神道博物館』平成22年4月1日増補改定 皇學館大学 佐川記念神道博物館
- 『お米の大研究』平成27年12月8日 株式会社エエエ研究所
- 『大嘗祭六ツ美悠紀斎田100周年記念事業記念誌』平成28年2月25日 六ツ美悠紀斎田100周年記念事業実行委員会
- 『安城の三河万歳』平成28年3月13日 安城市教育委員会
- 『新編新しい国語六』平成29年2月10日 小森茂東京書籍株式会社
- 『即位礼と大嘗祭』令和元年5月31日 皇學館大学研究開発推進センター
- 『御代替り平成から新しい御代へ』神社本庁

皆様方には数々のご教示を賜りました。記して感謝の意を表します。
(以下敬称略)

- ・長坂宇一
- ・東海学園大学 中出美代 廣田匡則
- ・綾川町役場綾上支所
- ・池田高康
- ・宇野まつ江
- ・岡崎天満宮
- ・神谷康子
- ・柄澤照文
- ・小林也寸志
- ・神原旭完
- ・神原祥隆
- ・志賀医院
- ・真宗大谷派三河別院
- ・鈴木功
- ・野本欽也
- ・早川佐代子
- ・深川けい
- ・深川みらい
- ・藤井建
- ・松井直樹
- ・六ツ美悠紀斎田保存会
- ・悠紀の里サポーターの会
- ・岡崎市教育委員会

『齋田のその後』

大嘗祭悠紀齋田は、昭和四十一年に岡崎市無形民俗文化財に指定され、主基齋田は平成十二年に香川県綾歌郡綾川町有形・無形民俗文化財に指定されました。それぞれの地に資料館が整備され当時の用具、衣装、絵はがきなどが展示されています。

また、令和元年六月二日（日）には岡崎市と綾川町の間で交流提携が締結されました。

今後、益々交流が深まり文化財の保存・伝統文化の継承がなされることでしょう。



主基齋田記念館



六ツ美歴史民俗資料室
(岡崎市地域交流センター)

・小学校高学年以上を対象としてふりがなをふっています。
・宇平さんの日誌、硯などは、現在岡崎市教育委員会に寄贈され、保管されています。

「宇平さん」の奉耕絵日誌

大正四年大嘗祭悠紀齋田記念紀録

令和元年十一月八日発行

著者 池田節子

制作・発行 池田節子

印刷 有限会社イズミ印刷所

東海学園大学健康栄養学部栄養教育研究室

■ 大嘗祭だいじょうさいって

どんなお祭り？

■ 悠紀斎田ゆきさいでんって

どこにあったの？

■ 宇平さんって

どんな人？

■ 下の五人は

どういう人たち？

